

『イギリスにおける労働者階級の状態』に学ぶ

第6回

関東ブロック

諸 結 果

6. ブロックに分担して学習

司会：千葉真協は「諸結果」を担当することになりました。ここは65ページあるので、私の方で10ページ程度に区切ってそれぞれ分担してレポートしてもらいました。

冒頭「都市に住むイングランドの労働者がおかれている生活状況をかなり詳細にしたいまこそ、これらの事実から結論を引き出し、さらにその結論を人情とくくられるときであろう。そこで、このような境遇のもとで労働者そのも

のはどうなっているのか、彼らほどのような人びとなのか、彼らの肉体的・知的・道徳的状态はどのようになっていくか見ることにしよう」で始まっています。それでは、最初に司会の私（和田）から

ストライキで労働条件が向上

和田：イギリスの産業革命は、繊維工業で紡績機械や織布機から始まりました。蒸気機関の発明は紡績機に応用され飛躍的に生産量は激増したんです。

エンゲルスが執筆した1844年11月～45年3月、イギリス（ロンドン）の労働者がいかに悲惨な生活を強いられていたのか、婦人や少年が劣悪な労働環境で1日14～15時間におよぶ長時間で働かされていました。ロンドンの労働者の住宅は不潔な住宅でした。

また長時間労働と低賃金は労働者の命を縮めていきました。けれども、イギリスの労働者階級は立ち上がり労働組合を結成しました。労働運動の指導者達は、議会に対して労働条件改善のため、工場法制定の運動を展開して18

◆みんなの学習講座



千葉県協の学習会

47年に婦人・未成年者の10時間労働を勝ち取りました。1875年にくきた労働組合法によって労働争議中の刑事罰が廃止されて、19世紀末の労働者は劣悪な労働環境や住宅環境から脱却するために団結したんです。そしてストライキで労働条件の向上を勝ち

取ってきたんですよ。

いま日本における労働者階級の状態はどうなっているんだろうかと考えると、労働組合で労働条件の向上を目指すどころか、合理化を進め労働者の首切りに加担しているところもあります。このまま労働組合が衰退していけば19世紀末のイギリス労働者のような状態になっていくのではないかと思います。

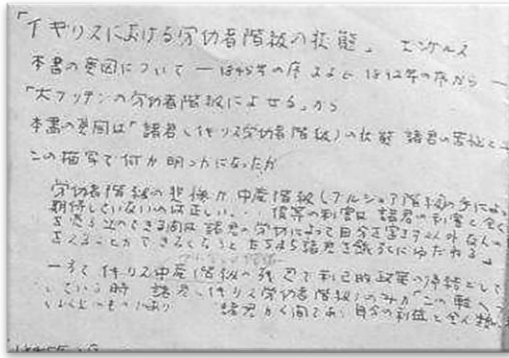
司会：それでは次に星野さん、お願いします。

「チフス」の流行と「飲酒」

星野：約300年前、イギリスは資本主義国の先端を走る国でしたが、労働者階級の状態はまさに悲惨でとても人間らしく扱われていなかったんですね。住居の問題、伝染病やその他の病気等の対応、そして食物の問題、すべて貧困が原因でした。そして物が不足した

時期は、商業恐慌や凶作の要因が「チフス」の流行です。このような状況からも労働者の健康状態は予想できません。個々の労働部門の特有の有害は別の頁で述べられています。

労働者の健康問題の一番の要因は「飲酒」ですね。働きがいが「飲酒」しなければいけない状態だったんでしようね。それが「チフス」の流行に拍車をかけました。いわゆる「もぐり医者」やインチキな薬に頼らざるを得なかったんです。多数の慈善施設はあったんですが、とても足りなかったんです。住民の四分の三の人が毎年医者の助けを必要にしている都市で、それだけのことができるのか。まして、イングランドの医者代は高く労働者には払えません。そこで「アヘン」が使われてしまうんです。労働環境が悪く健康な労働者はほとんどいません。上流・中級階級の死亡率は低いので全階級の死亡率を緩和していますが、階級



約半世紀前に書かれたレポート (部分)

別にみると大きな差があります。さらに家屋と街路調査しても死亡率に大きな差があります(※注①…209頁の表③参照)。

この本を読むのは何十年ぶりかと思えました。社青同(社会主義青年同盟)以来かな? あれ、これは当時のレポートが挟まっていました。

最近イギリスに住んでいる「ブレイダイミカこ」さんが書いた『ぼくはイエローでホワイトで、ちよつとブルー』を読んで、これはエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』の現代版だなぁと感じました。かといって、深く理解し記憶している訳でもないし、また私も多忙で毎日何かしらず定が入って、読み返してみろ気にはなれなかつたんですが、今回、レポートの担当のところは読みました。

両方を読んでみて、基本的には資本主義社会では貧富の格差は解消できないでいるし、その上宗教や民族問題も絡んでいます。労働者階級の解放は前途多難ではあるとは思うんだけど、こうした分析を活かして解決の道を見つけることが出来るのではないのでしょうか。

司会…社青同、当時に学習していたんですね。レポートの紙(B4)も茶色になってますね(笑)。そのレポート

は約半世紀前くらいに書かれたものですね。

星野…そうですね、そのくらい前に書いたものです。(拡大鏡使用して)・・・これはたしかに私の字ですね。

司会…次に同じところをレポートした秋島さん・菊地さん、お願いします。

エンゲルスさんに聞きてみたい

秋島…読んでみて労働環境もひどいですが、生活する住民、食事、生活環境がなんとひどいなあと思いました。「イングランドでは社会が社会的殺人を、毎日、毎時間犯していること、社会が労働者の健康を続かせない、長生きできない状態にしていること、社会がこのような労働者の生命を少しずつ、徐々に削り取り、早々と墓場に連れていくこと、このような状態が労働者の健康や生命にとっていかに有害であるかを社会は知っておきながら、改善す

◆みんなの学習講座

るためには何も行っていないことを私は証明しなければならぬ」と書いてありました。今も証明しなければならぬことがたくさんあるんじゃないかしら。

改善するためになにもしてこなかったことを証明しなければいけないと、どうして立ちあがったのか、エンゲルスさんに聞いてみたいなあ。

怒りを感じている間は人間

菊地：労働者階級の健康状態に関する報告があり、平均寿命は35歳、という事実について書かれている部分があります。都市部と農村部の割合についても興味深い部分と、どの宗教も自分の学校を持っていて、17歳の若者が、ごく簡単な質問に対して「さっぱりなにもわかりやしねえ」とそっけなく答えたところが特に印象に残っています。「黙扱いされている労働者が本当に黙

になったり、あるいは権力を握っているブルジョアジーに対する燃え上がる憎悪や、絶えざる心中の憤激によってしか、人間としての意識や感情を維持できなかつたりしたとしても、驚くには当たりません。彼らは支配階級に対する怒りを感じている間だけは人間なのですから」これも重要なところだと思います。

困窮が労働者に与える選択の余地とは、次第に餓死するか、即座に自殺するか、あるいは必要なものを見つけ次第に手に入れてしまっか、盗んでしまっかです。自殺はもともと上流階級のうらやむべき特権でしたが、イングランドでは、プロレタリアの間でも流行となりました。そして多数の貧民が困窮を回避するために自殺しましたが、そうでもしなければ、貧民は困窮から脱するすべがなかったのですね。
司会：秋島さんの言う通り、今でも証明するために、私たちの学習や行動が

重要ではないかと思われすね。それでは次に平良さんお願いします。

二つに一つしか道がない労働者

平良：イングランドの労働者の状態の一番の問題点は、プロレタリアはおよそ人間の考えうる最も言語道断な、最も非人間的な状態におかれていることです。奴隷は主人の私利私欲によって、少なくとも存在は保障されています。プロレタリアはただ自分だけが頼りです。

いったいなんのために彼らは働くのか？ 彼らが働くのはかねのため、労働の内容そのものとは全くなんの関係もない事柄のためです。工場労働における分業は強制労働の動物化作用を更に何倍にもします。労働部門の仕事はたいいていの労働部門において、毎分毎分繰り返され、毎年毎年変わる事のない、つまらない、全くの機械的操作に

限られています。労働者には二つに一つしか道はありませんでした。それは、自分たちの運命に身をゆだね、「立派な労働者」となってブルジョアジーの利益を「忠実に」守るか、自らの人間の性のために闘うか、どちらかです。後者ができるのは、ブルジョアジーに対して闘う時に限られます。こうした傾向は、大都市になって、プロレタリアートとブルジョアジーとの対立が深まって行きます。

司会…それでは次に林さん、お願いします。

原因は資本家たちが作る社会

林…労働者は自分の地位と利益を認識しはじめ、自立的発展を始めたんですね。このときはじめて労働者は、自分の思想や、感情や、意志表示の点でもブルジョアジーの奴隷であることをやめました。そしてこれには、主に大規

模な工業と大都市が影響していたんですね。

そして、大都市でプロレタリアートとブルジョアジーとの対立がはじめて現れて、大都市の労働組合から、チャーチズムや、社会主義が発せしたんです。

大都市の影響と、イングランドの労働者の特性に多大な影響を及ぼした一つの要因は、アイルランド人の移住です。その内容がこの「諸結果」の前に詳しく書いてあります。

労働者が「酒と女」に溺れていく原因は資本家たちがそのような社会にしているとしています。

司会…それでは最後に坂尾さん、お願いします。

墮落と反抗から二大階級に

坂尾…当時の労働者やその家族を含めた労働者階級が資本家階級によって社

会秩序というかたちで、どのような扱いを受けてきたのか、その結果おこる墮落と反抗をつうじて、資本家と労働者の二大階級に分かれ、資本家階級が倒されるという自然法則を述べています。アルコール飲料の放縱な享樂とならんで、放縱な性交も多数のイングランド労働者の主たる悪習です。ブルジョアジーによつて、動物のような状態に人々が置かれるなら、反抗するか転落するしかありませんでした。

社会秩序が敵対的としか見えな階級に対して、ブルジョアジーが社会秩序を尊重せよと要求するのは過剰な要求です。

ブルジョアジーの粗暴な扱いによつて、労働者は意志のない物体となり、イギリス国民は世界で最も犯罪的な国民になりました。刑事犯の逮捕者が1805年から1842年の37年間で7倍になったと書かれています(※注②)250頁の表⑤参照)。そして、こ

◆みんなの学習講座



昨年12月の総会から「みんなの学習講座」取組む。

左側：平良、右側：後ろ左から、宮島、和田、

星野、関東ブロック小林事務局長(オルグ)

前列：秋島、林、菊地と(撮影者の坂尾)

の犯罪のほとんどがプロレタリアートの
のものです。

これらの事実から、墮落と犯罪が
20年も続けばどうなるか、社会が完
全に解体しつつあることがわかります。

ブルジョアジーはこのような出来事
を新聞で毎日読んでいるにもかかわらず
ず静かで、落ち着いている事と、その
立場からは事実すら、また事実の結果
をも認めることができないことにエン
ゲルスは驚いています。また、ブルジ
ョアジーが人間の一階級全体を盲目に
していることに驚きます。そうであつ
ても国民の発展は止まりません。

一 九世紀イギリスの状態と今？

司会：皆さんのレポートで、今でも当
てはまることが多いのではないかと思
います。

宮島：そうですね。日本の若い人た
ちも本に書かれているようになりつつ
あると思うなあ。労働者の墮落を身近
に感じる社会になってきているように
思うのと、今、日本の状況は労働者が
闘わないから、闘う事を忘れさせてい
るのではないのかな？

和田：テレビなどのニュース等の犯罪
はプロレタリアートにもなっていない
人、つまり無職の人が結構いますね。
これは当時のイギリスの状態よりひど
くなっているんじゃないかな。
林：産業革命で社会が良くなつていく
のかなあ？

今も機械化で資本主義が発展してき
ているのに、生活が良くなるどころか
機械の発達で、反対に労働者は苦しめ
られているのは、当時のイギリスと今
も同じ。生活が楽になるところか生活
が苦しくなるのが資本主義社会です。
結婚も出来ない、子どもが産まれな
い少子化問題は、当時のイギリスより
もつと悪くなるんじゃないでしょうか。
司会：私たちは「諸結果」の部分を受
びました。全体をつかむには上・下巻
を読むことが大事ではないでしょうか。
次回は「個々の労働部門」です。工
場労働者と女性労働者について詳しく
学習していきます。